

この二人の女性を支えてあげてください

三 輪 地 塩

奨励者紹介〔みわ・ちしお〕

同志社大学神学部助教

〔研究テーマ〕日本キリスト教史、キリシタン史

わたしはエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱きなさい。なお、真実の協力者よ、あなたにもお願いします。この二人の婦人を支えてあげてください。二人は、命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせて、福音のためにわたしと共に戦ってくれたのです。主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

（フィリピの信徒への手紙 4章2―7節）

二人の女性の仲たがい

フィリピの信徒への手紙の著者パウロは、二人の女性に対して次のように伝えます。「わたしはエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱きなさい」。この二人の女性は「婦人」と訳されていますので、少し年配の女性たちと考えて良いでしょう。さらに「主において同じ思いを抱きなさい」と勧めます。つまり彼女たちは「別々の思いを抱いていた」、もっとありていに言えば「仲たがい」をしていたのです。このことが原因で、フィリピ教会は混乱していたと考えられます。

エボディアとシンティケという二人の女性は、聖書の中でただ一回だけ、この箇所しか出てこない名前です。ですから、伝道師や指導者というよりも、フィリピ教会の中で中心的に頑張っていた、重要な女性たちという感じでしょう。この頑張っている彼女たちの仲たがいを何とか収めてあげたい、という切羽詰まった息遣いを感じる文章です。

パウロは次のように言います。「なお、真実の協力者よ、あなたにもお願いします。この二人の婦人を支えてあげてください。二人は、命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせて、福音のためにわたしと共に戦ってくれたのです」（フィリピの信徒への手紙4章3節）。クレメンスという人物は当時のキリスト教界で有名な指導者でしたから、彼と共に働くほどの功労者であると二人を賞賛しているのです。以上のことから類推しますと、エボディアとシンティケという二人の仲たがいは、単なる痴話喧嘩ではなく、教会の中心的地位にある女性たちの意見の相違であり、運営方針の衝突ではないかと思われます。今でいうところの教会役員会や檀家総代での意見対立という感じでしょう。ですからこの時のフィリピ教会は、かなり混乱していたはずなのです。

女性によって創設されたフィリピ教会

そもそもフィリピ教会の始まりは、女性たちの働きによるものでした。パウロが初めてフィリピに行った際、リディアという女性が洗礼を受けた後、リディアとその家族たちが自宅を開放し、フィリピ教会の基礎が作られ、その後も女性たちが中心となってこの教会は発展したと考えられます（使徒言行録 16 章 11—15 節）。当時の地中海世界は、家父長制のいわゆる男社会でしたが、この教会が女性中心であったのは、自然な流れであったのでしょう。

しかし、今ここで問題になっているのは、その中心人物である女性同士の仲たがいです。どんな組織でもそうですが、指導者同士の意見の相違は、そのコミュニティのモチベーションを下げます。サッカーでも野球でも、フロント陣・首脳陣が混乱するとチームを混乱させ、低迷させてしまいます。同じように、教会の指導者たちの仲たがいは教会を弱くさせます。つまりエボディアとシンティケの仲たがいが収められるか否かは、フィリピ教会の生命線であったというわけです。

この手紙を書いているパウロは彼女たちを非難しません。また仲たがいを叱りつけることもいたしません。どちらか一方の味方をするのではなく、両方とも欠くことのできない重要な人たちであると認めた上で、彼女たちを支えるようにと呼びかけているのです。特に「福音のためにわたしと共に戦ってくれた」という言い回しがパウロの心を表しています。キリスト教がまだまだ世に知られていなかった紀元 1 世紀のギリシャ世界においては、キリスト教（徒）は理解されないどころか迫害をすら受けていた状況です。そのような中を共に戦ってきた仲間たちだと賞賛するのです。

真実の協力者への呼びかけ

そこでパウロはどうしたでしょうか。「真実の協力者よ」と呼びかけ、誰かが仲を取り持つことを求めています。この「真実の協力者」という言葉は不思議な呼びかけであるように感じます。なぜなら具体的な名前が書かれていないからです。つまり「特定の誰か」への呼びかけではなく、「仲たがいを収束させてくれる良心的な誰か」が想定されているのです。

世の中を見渡しても、また私たちの経験を考えてみても起こり得ることですが、人が喧嘩したり、反目し合ったりする事案があると、かえってその溝が深まるように面白がって焚きつけ、いたずらに対立構造を煽るような人たちが存在します。事柄を「収束」に向かわせるのではなく「混乱」させる人。今も昔も、洋の東西を問わず、このような人は人類史の中で常に存在してきたのかもしれません。

パウロは、そのような非協力者にではなく、この婦人たちが立ち直るために尽力してくれる人々、心ある人々がいることを信じて「真実の協力者よ」と語り掛けるのです。

しかし、この聖書箇所を読んできて「あれ？」と思うんですね。そんなに仲たがいを収束させたいのなら、手紙というまどろっこしい仕方ではなく、パウロ自身がフィリピまで出向き、彼女たちの喧嘩を収めればよいではないか、と、そう思ってしまう。そもそもパウロはフィリピ教会の創設者なのですから、この二人の仲たがいの女性たちも、お互いに収束させることはできずとも、パウロ先生が仲裁に入るのであれば、留飲を下げて、取り敢えず「喧嘩両成敗」を引き受けて収束させることができたに違いないのです。しかし、パウロは自分で行くことはありませんでした。それは、パウロがフィリピに行けない理由があったからです。フィリピの信徒への手紙 1 章 12—13 節には、とても興味深いことが書かれています。

「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、（後略）」と書かれています。つまり、パウロは監禁されていたということになります。「兵営全体」と書かれているように、ローマ帝国の兵士に捕まっていたと考えられます。恐らくキリスト教を布教したことを罪に問われて捕縛され留置されたのでしょう。だからパウロ自身がフィリピに出向いて彼女たちを支えることができず、フィリピ教会には自助努力で何とかしてもらうしかありませんでした。そのため協力者に呼びかけたというのです。

「主において」同じ思いを抱くことこそ重要

そもそも、パウロがフィリピ教会に行けたとして、この二人の仲たがいは解消されたでしょうか。答えは「ノー」だと思います。彼女たちがパウロに直接会って、彼の顔を立てて怒りを鎮めたとしても、単なる一時休戦であって、パウロがそこを去ればまた意見の相違による対立が生じると思うのです。根本的な解決をしなければ、人間はそんな簡単に理解し合えないことは、昨今の国際紛争が如実に物語っています。仮にもしパウロが「わたしが行くことさえできれば、彼女たちの仲たがいを簡単に収束させられた」と考えていたとすれば、それは大きな間違いであると思います。一人の人間ができることはそれほど大きくないからです。誰か一人の力によって、力づくで、あるいは権力的に人を束ねてみたり、人の意見や反論を無理矢理モミ消してみたりしても、根本的な原因が消えなければまたすぐ元に戻ってしまうのです。

パウロもそのことを知っていたのではないのでしょうか。もちろん牢獄に入っている監禁状態にありますから、行きたくてもいけないのですが、そもそも「私がいなければフィリピ教会は成り立たない」などという傲慢な考えは持っていなかったのでしょうか。なぜならば、パウロは「主において」という言葉を度々使っているからです。この言葉こそ、当該聖書箇所でも最も重要な言葉であると思います。

2節「主において同じ思いを抱きなさい」。4節でも同じように「主において常に喜びなさい」とパウロは語ります。「主において」というのは、人間の力ではなく、我々のすべてを神に委ねることを言い表します。キリスト教的な言葉ですから少し言い換えてみても良いかもしれません。例えば、「より高次の」とか、「自分の考えの上位概念」とか、あるいは「世の通念より上位の目的」というような言い方もできるかもしれません。それをキリスト教信仰においては、「神」（かみ）、「主」（しゅ）と言っているわけです。

このエボディアとシンティケの喧嘩の原因は具体的には分かりませんが、例えば現代の教会に置き換えると、「教会の目的を何であると考えるか」という問題。つまり「信仰者を増やすことを目的にするのか」あるいは「教会に入ってもらう人を増やすのを目的とするのか」というようなことはいつも意見がぶつかります。「世俗化するのか」、「保守的な信仰を続けるのか」ということですね。キリスト教会で、しばしば問題にされるのが、「厳粛な教会であること」と「誰でも受け入れる温かみのある教会であること」の両者が反目し合ってしまうことです。伝統的組織体としての教会であることと、コンテンプラリーな若く現代的雰囲気のある教会であることは、なかなかうまく両立しにくいものです。卑近な言い方をすれば、「大衆食堂を目指すのか」、「舌の肥えた味の分かる少数客に来てもらいたいのか」ということ。あるいは学生視点では、「楽しい部活やサークルを目指すのか」、それとも、「ガツガツ追い込んで、勝つことや、賞を取ることを目的とした部活・サークルを目指すのか」と言い換えても良いでしょう。つまり「どちらも正しい」と

ということです。一つのコミュニティー、クラブ、組織などは、それが崇高な目的であろうとなかろうと、どんな集まりでも、急進派と穏健派、革新派と保守派の対立は必ず出てくるものです。人間の集団であれば当たり前の相違です。人間の作る社会なんてものは、そもそも別々の生き方をし、別々の考え方を持っている者たちの集合体です。どんな組織も、企業も、学校も、クラスも、サークルの仲間たちも、教会の構成員でさえも、集まる人みんながすべて同じ考え方などありません。

より高次の自分たちを目指して

しかし、「主における一致」ならば可能なのだとパウロは言います。この時の二人の女性たちは、お互いに譲れない主張をしていました。そこには回復しえない決定的な溝があったことを思わされます。しかしひとたび「主において」「一致する」ことができれば、溝や亀裂を回復させることができるということです。より高次の目的、より上位の概念によって、メタな部分で自分たちが成そうとしていることに着目すれば、一致は可能であると。

そのためには、他者の協力が必要なのだとパウロは言います。キリスト教信仰における、重要な根源的なメッセージの一つは「回復」です。キリスト教は、「イエス・キリストの十字架」と「復活」によって、「罪から回復」「永遠の死からの回復」が与えられたと信じる信仰です。赦されざる罪、死に至る病、それらをキリストという存在によって「回復」した。それを信じ、感謝し、願い求め続ける教え、それがキリスト教信仰です。

私たち人間は、一致することが難しいし、意見の相違を束ね、合意形成することも本当に難しいものです。だからこそこの世は、至るところで分裂を引き起こしているのです。同じ国民同士、異なる民族間の分裂。同じ民族間の近親憎悪。それらはやがて差別意識を助長させ、迫害や殺戮を生じさせていく。悪のスパイラルが人間の憎悪を更に深めていきます。しかしこのような人間だからこそ、このように我々が悪意と敵意を持っているからこそ、「主において」「より高次の」「より上位存在」に心を向けるとき、7節の最後の言葉が心に響くのです。「あらゆる人知を超える神の平和が、私たちを守っていく」と。私たちは、エボディアとシンティケのような論争に遭遇します。自分自身が争いの当事者になることもしばしば起こります。だからこそ、人間が分裂しがちな存在であるという事実を受け入れ、それと同時に、真の協力者たり得る者でありたいと願うのです。私たちはこの世においてどう生きるのか。「破壊」ではなく、「構築」する生き方。「消滅」させるのではなく、「回復」をもたらす生き方。無から有を生じさせる、人間の人知を超える、「主の力」を願い求め、私たちは回復と希望を呼びかける者でありたい。そのように心から願うものです。

2023年6月 28 日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録